



香坂高宗

香坂高宗は去る大正四年の十一月十日、今上御大禮の嘉節に際して従四位を贈られたが、今回大鹿村大河原字上藏に於ける其墓所に於て、贈位報告祭が行はれることになった。

吉野朝の隠れたる勤王家、我が郷土の光華たる義烈者、香坂高宗は如何なる家系を有し、何處に生れ、また如何なる活動をなしたる人であるかと云ふに、由來我が國史に於て、吉野朝の君臣に關するもの程、材料が闕けて居て、史實の闡明に困難なものは少ないとは斯道専門家の齊しく唱道する所である。其時代の人であるだけに、高宗の事蹟についても同様、不明の點が甚だ多いのである。随つて異説が甚だ多い。

高宗の生所や、家系に關する種々の説を擧げて見ると、高宗は上野の郷士であるとも、信州の豪族であるとも云ひ、姓は北條或は滋野と傳へられて居る。滋野系であるとすれば、當時小縣佐久邊に居た勤王黨の滋野の一族であらう。又北條系なりとの説に據るとすれば、高宗を以て高時の

第二子北條時行の子である。即ち香坂某の女は時行の室で、其子は高宗なりとなすのである。さうすると、宗良親王御入信當時の高宗は五六歳の幼童であつた事になるが、五六歳の高宗が親王の爲に御便宜を圖つたことはチト受取りにくい話となる。加之、一説には高宗此時其子高重をして松平城を守らしめたところから愈おかしい。高宗は上野の人でも、信濃の人でもなく、相模の北條時行の變名である。即ち高宗時行を同一人であるとの説もあるが、これは誤である。

大河原城主の高宗と北條時行とはどうしても別人として見なければならぬと思ふ。なぜなれば、時行が建武二年以後に於ける行動は近頃に至つて確實なる材料が發見され、死所も明になつて居て、それは高宗とは何等の交渉もないからである。

かくの如く、異説紛々たるものであるが、當時の形勢から觀察し、又高宗一生の行動上より之を綜合的に考へて見ると、彼が始終大河原に在つて行動したことや、其他種々の事情に因つて私は「高宗は信濃人なり。」と直覺的に思はれてならない。私は實にかく信じて居るのである。

右の如く高宗の出所に就いては、正史はこれを傳へて居らぬから、今之を確實に考ふることは非常に困難である。吾々は唯「吉野朝時代に於て、信濃大河原に豪族香坂高宗あり。」と云ふことだけは（宗良親王の御著「李花集」によりて）確認されるから、其家系調べは後日有力な史料を得た時

まで、譲つておき、今は高宗一代の事蹟について考へて見たいと思ふのである。これとても、不明の點が少なくないことは前に述べた通りである。

高宗が誠忠の歴史を知らんとするものは、先づ征東將軍信濃宮宗良親王の御事蹟について知らなくてはならぬ。高宗は親王に扈從した人であるから、親王について其關係のある部分を語れば、高宗は自ら明になる道理である。故に、私は親王の御事蹟を達觀しながら、彼のことを調べて見たいと思ふ。

二

宗良親王は後醍醐天皇第八の皇子（或は云ふ第二と、或は曰ふ第四と）で正和二年（或は云ふ元年と）に誕生あらせられ、御母は大納言藤原爲世の女の贈從三位爲子である。御年十餘歳にして、妙法院の門跡に御入室になり、御名は尊澄法親王と申奉り、次で御兄大塔宮尊雲法親王の後を襲うて、天台座主とならせられて、三品に叙し、暫らくは比叡山に御座あらせられた。

元弘元年の二月天皇が笠置に幸せられた時、花山院師賢が比叡山へ伴つて鳳輦の巡をなしたるも、事顯はれて僧徒等は皆叛き去つた爲に、尊澄法親王は笠置へ落ちさせ給うた。然るに、此處もまた賊兵の手に陥り、遂に囚はれとならせられ、長井高廣に預けられ給ひ、讃岐國に御配流の

身となり、松山の里に御住居あらせらるゝ事となつた。

かくて、其後兩六波羅の館は一片の煙となり、稻村崎の亂入に、鎌倉百五十年の覇業は一朝にして亡び、建武中興の大業其の緒に就くや、法親王は一隊の兵を隨へて御還京になり、建武二年三月には叡山に上られて座主に復され、二品に叙せられた。

是より先、高時の亡びた時に、第二子の時行は難を逃れて信州に走り、大祝諏訪時繼をたよつて來て、今の上伊那郡藤澤川の邊に深く匿れて居たが、建武二年の七月、諏訪頼重及其子時繼は小縣の滋野一族と共に時行を主將として、兵を信濃に舉げた。守護の小笠原貞宗は兵を發して之を討たんとしたが、勢中々猖獗であつたので、使を馳せて變を上つた。時行は進んで武藏に入り、直義は之と井出澤に戦つて敗績し、護良親王を弑し奉つて西に奔り、時行は月の廿五日に鎌倉に入つた。

尊氏は之を聞いて、八月京都を發し途々凶徒を運破して鎌倉に入り、大に時行の軍を破り、頼重等は、面皮を剝いで、鎌倉の大御堂に戦死したけれども、時行は危地を脱した。この中先代の亂は尊氏の叛を促進して、建武中興挫折の直接導火線となつた。延元元年尊氏が兵を以て京師に上るや、天皇は延暦寺へ御幸になつた。此時親王をば一品に叙せられて、一山の僧徒を勵まされ

た。(天台座主の一品に叙せられたのは、これが始めてである。)

三

斯くて尊氏の西走となり、東上となり、楠木正成の戦死となり、天皇の京師御還幸となり、續いて吉野の御巡狩となつて、茲に天下は兩分して、官方武家方の鬭争に寧日なく、所謂吉野朝時代を現出するに至つた。

四

宗良親王は後圖をなされん爲に、延元二年夏の頃には伊勢國一の瀬の山中に御座して、北畠氏と氣脈を通じて居られたが、後、遠江國の豪族井伊介道政の奉ずる所となつて其地に赴かれ、東國の經畧に従事せられた。

延元三年の春、北畠顯家が奥州から大舉して西上するに當り、親王は兵を率ゐて之に参加せられ、美濃國青野原や、攝津の國の住吉、天王寺に轉戦せられ、顯家が戦死の後、吉野に御入りになつた。其秋勅によつて、再び井伊城に赴かれた。

井伊城御在城當時に於ける親王の勢力範圍は、先づ遠江を中心にして、北は信州の南部伊那諏訪地方に、東は西駿河、西は三河の東部に及んで居たので、其形勢は東海道筋を中斷して京鎌倉の

連絡を妨ぐることも大なるものがあつた。そこで、尊氏は四年の七月に高師泰兄弟に命じ、大兵を以て井伊城を圍み、遂に之を陥れた。親王は屈することなく、餘衆を集めて又大平城に據られたが、八月再び敗られた。三河國足助の城主足助重春は無二の官方であつたから、頻りに使を以て親王の御入來を請うたが、種々の都合があつて、親王は駿河國なる狩野貞長の構へた安部城へ御入になつた。

丁度此時に、北條時行は諏訪頼繼（時繼の子）を語らひ、安曇の仁科氏と氣脈を通じて伊那郡の大徳王寺城で（上伊那の藤澤附近ならんか）兵を挙げ、小笠原貞宗がこれを攻めつゝある由を聞し召されて、後援をなさらうとの御考で、駿河の安部城を出發され、信州諏訪下宮祝の許へ御着になつた。

現今の長地村宇柴宮に存しておる柴宮八幡宮の社地は親王御所の遺蹟であるとのことである。親王は滋野の一族や下社の祝等を率ゐて赴き救はれやうとなされたが、小笠原氏に遮られて意を果すことが出来ないで居られるうちに、武家方の包圍益々急にして、城中は糧食の缺乏を告げ、十月城遂に陥り時行等は圍を潰して諏訪へ逃げ込んだ。

大徳王寺城の陥落後は、府中の井川館に在る貞宗の一國鎮定の活動が頗る盛であつた爲に、信

州に於ける官方の勢力と云ふものは、此處暫く輓回の困難なことを御悟りになり、興國元年の冬、越後國に赴かれて、寺泊の五十嵐氏の許に居られたが、この所でも、武家方の雄將上杉憲顯の爲に官方は段々と其勢力を感められるに至つたから、興國三年の冬、親王は轉じて越中に赴かせられ、奈吳浦なる石黒重之の許に御留りになつた。

一説には、興國二年の夏親王は信州に入らせられ、それより越後に赴くとあり。

五

一體、下伊那は四圍に山岳を繞らし、且、中央には可なり廣い肥沃な廣野があるので、落武者の隠れ場所には恰當して居て、伊那の歴史は落武者の歴史と云つてもよい位であるが、其中でも、大河原の地は峻峭重疊たる赤石山脈と、蜿蜒連亘の伊那山脈との間に夾まれた深山中の深山であるから、幽棲の場所としては最もよろしい。而も北入川に沿うて北行すれば、市瀬を経て高遠より諏訪に通ずることが出来、南の方は地藏峠を越えて遠山を通つて遠州に達する一路を有して居る。又西の方伊那の平野に向つては險難ではあるが、伊那中央山脈の尾根傳ひに峠を越して、一直線に喬木村の氏乗、富田を経て知久に通ずる捷路が開けて居た。（此道今は廢れて、唯獵師などが通ふのみである）而も、群嶺層々の間に田園の開くるあり、深山幽谷の間、別に小瀬川に沿うたる

桃源郷とでも云ふべき小やかな平地をも有して居る。

そこで當時、信州に於ての官方武家方の配置を達觀すると、天龍以西には伊那の中央部たる松尾城には守護小笠原貞宗が居て、松本平に別館を設けて此所に出張し、全信州を壓して居るから、龍西より松本平にかけての一帯は先づ武家方の勢力範圍であると云つてよいが、北安の仁科氏は官方であつた。龍東伊那山脈の西には神峯に知久敦貞が居り、大河原の香坂氏や、諏訪の大祝家と互に連絡を通じ、而して北條時行は此の間に出没して居て、何れも小笠原氏に相拮抗する所の官方である。即ち大體に於て、南信濃を天龍川に沿つて縦に斷つた東は官方で、西は武家方であると云ひ得る。北信に於ては、佐久地方の滋野、海野諸氏を始めとして小縣の村上氏の中にも小笠原氏と隙を生じて官方に屬した様である。而して興國より天授に至る約四十年間に於ける、本州中部官方の根據地策源地は大河原であつた。大河原が斯く重要な位置を占むるに至つたのは宗良親王の御滞留に基因する。

かゝる中に、越の國に於ける官方も頼みとする所が少なくなつたので、親王は再び信州に入るの機運に際會せられた。

六

信濃に於ける官方の頭首とも目すべきは門閥上北條時行であつたらしい。この時行や諏訪頼繼等の意見により、親王を留め奉るべき場所としての諏訪は地勢平蕪にして、四通の地で守るに難いばかりでなく、小笠原氏の居館井川にも近くある。高遠は山中ではあるが、まだ危険であると云ふので、遂にこの天嶮且遠隔の大河原へ親王を御迎へすることになつたのである。

此時、香坂高宗は御案内として諏訪まで出張し、杖突峠を越え、市瀬を経て無事に大河原へ御連れ申した。時は興國四年の冬か五年の初めのことである。

「李花集」には

興國五年信濃國大河原と申す山のおくに籠居侍しにたたかりそめなる山里のかきほわたり見ならはぬ心地し侍しにやう／＼わかぬ春の光待出づる鶯の百囀もむかしおもひてられしかは

かりの宿かこふはかりの呉竹をありし園とやうくひすのなく

春ことによひやとりせし鶯も竹のそのふに我しのふらん

とある。これは大河原御吟詠の最初のもつと傳へられて居る。親王はこの頃から、この地を根據として御留まりになり、官方の勢力發展の籌策をめぐらされることになつたのである。

一説に、親王は最初の信濃入りの時、即ち興國元年に大河原へ御入城になつた。そして、九月に脇屋義治が尾張から大河原へ来て、將軍の宮に拜顔し香坂等と軍議し、又遠江に行き秋葉城を修理して之に據り、大河原城と連絡して大に勢を張つた、とある。又一説に、北條時行はもと大河原桶谷の里に忍び隠れて成人したので、此邊の地勢に明るく、遂に親王を駿河から御つれ申し、半年餘の後、越後越中宮方の請に任せ、彼地に赴かせ給ひ、二三年を経て此國へ御歸りになつた、とある。

時の大河原城主香坂四郎左衛門高宗は今の大河原市場から約十五町を東に、小澁川に沿つて上つた、字上藏^{ツツ}に城を構へ、今の市場を出はづれた所へ松平城を築いて高坂二郎をして之に居らしめ、字中尾に城を築いて堀田正重を置いたが、彼は親王の御來駕を無上の光榮と感じ、満腔の熱誠を捧げて回天の事業を補佐し奉つたのみならず、百方心を碎いて、この山間に於ける親王の居を安んじ、且は御心を慰藉し奉つたことである。

勿論、北條時行を始め、諏訪氏の一族なども、時々御機嫌伺ひや御相談に來たことであらう。時行はある期間、此の附近に住居をしたことが有つたと思はれる。大河原から飯田へ出る道筋の字桶屋には小字頭^{トウヤシ}屋敷があつて、時行の屋敷跡と傳へられて居り、桶谷を過ぎた所に、北條を名

乗る四戸の家から成り立つて居る北條といふ小部落があり、それより上の急坂を北條坂と稱へて居る。何か時行と因縁があるらしいが、確實な書類が見當らぬから斷定し兼ねるのである。

親王は暫くの間は、この大河原城に高宗が心盡しの奉仕を受けさせられつゝ御滞留あらせられたが、高宗時行等は萬一の事を心配して、更に小澁川の斷崖に沿ひて行くこと一里半なる釜澤の地に御所を設けて親王御安居の所とした。

御所跡は釜澤の内字内倉の御所平にあつて、宗良^{ムネキヨ}尹良^{ユキヨシ}兩親王御住居の跡と傳へられて居る所で、大河原城より一里半許り東南に當つて居る。其他口碑として残つて居る親王關係の遺跡が少なくない。御的場は御所跡を距る西の方一町半の所にあり、御菩提所と稱せらるゝ大龍寺の跡は字寺垣外にあり、御閑居の地たる長谷庵跡は字寺澤にあり、尹良親王御陵墓や宗良親王の後紀伊のきさきの御陵墓や尹良親王の後、美濃のきさきの御陵墓や、御手植の越路の松や、御腰掛の石や、經塚などがあり、其外多くの遺品や文書の類が釜澤の村社や村内の諸寺院などに傳はつて居る。

又大河原城の跡は字上藏にあつて、釜澤に通ずる道傍の福德寺と大銀杏の樹の有る所から、東南數町を隔てた今桑畑になつて居るのがそれで渾濛の形が明に残つて居り、後方は斷崖が直に小澁川に迫つて居る。

竹の園生のやごとなき御身を以て、親王は興國四年の冬から文中三年に吉野へお上りになつたまで、三十有餘年の間この人里離れた深山幽谷の裡に在らせられた。其御籠居中の御物憂さは果してどんなであつたであらう。李花集に

雪つもる谷の埋木その儘にしらてや春をよそにすくらん

こと問はん人には告げよ郭公われ世の中にありとはかりは

稀にまつ都のつてもたえぬとや木曾のみさを雪うつむなり

あゝ、何たる悲調ぞや、この御詠を誦し來るもの、誰か其御いたはしさに同情の涙滂沱たらざるものがあらうか。

この間に於て、親王は機を見ては上野、武藏、美濃、尾張、遠江、越後等の諸國を往來して同志を糾合し賊を惱まされたることも、一度や二度ではなかつた。この煩悶遑る方なく、奔走流離臥薪の苦を嘗めさせらるゝの時、操守一貫少しも變ずることなく、常に親王に奉侍して慰藉し奉り、保護し奉り、時に或は出で、賊軍と戦ひ、ある時には御留守居役を承りて後顧の憂を絶ち、よりて以て親王を三十餘年間も此地に留め奉り、其の回天の事業の籌策地たらしめた唯一人の苦節者は實に香坂高宗其人であつたのである。

七

正平七年に足利義詮が和を請うた時、後村上天皇は權りに之を許し置き、其不意に乗じ、新田義興等に命じて鎌倉に在る尊氏を鎌倉に攻めしめた。二月、兒島高德は密旨を受けて、大河原へ來て義詮等の降を許したことを告げ、閏二月には勅使の由良信阿彌が來て、親王を征東將軍に任ずるの令旨を齎らしたと傳へられて居る。

この月、宗良親王は新田へ應援の爲に諏訪、滋野等を率ゐ、(高宗をも從へて行かれたと書いた書物もあるが稍疑はしい。)上野國へ御出掛になつて寺尾城へ御入りになつた。依つて土地の人は親王を上野宮と稱し奉つた。

一説に、正平四年親王は新田義宗等の迎によつて、上野國新田庄寺尾城に移り給ふとある。

此時新田義興は上野を根據地とし、信濃越後に於ける宮方の兵を糾合して十餘萬を得た。而して北條時行は一方の大將を承り、義興等と小金井原に陣し親王は本營を小手指原に構へられた。此戦宮方は大に尊氏の軍を破り、義興時行は尊氏を走らして鎌倉に入ることを得たが、新田義宗は敵と戦つて敗績し、退いて笛吹嶺(上信國境の碓氷峠ではない。武藏國比企郡の笛吹峠である。)を保つて居た。親王は諏訪氏、滋野氏、以下信州の諸士と共に、之れに御會しになつたが、武家方の

先鋒、武田小笠原、逸見等の三千餘騎に攻め立てられ、官軍は又々敗北して、義宗は越後に走り、以下の諸將亦離散し、義興時行等も鎌倉を捨てゝ走つたので、尊氏攻伐の計策は遂に無効に終つた。そこで親王は部下を率ゐ、再び伊那へ引き込まれるの止むなきに至つた。

一方、京都に於ては、義詮が八幡の行在所を攻むることが急であつたので、天皇は東北の諸將に詔して援を求めた。そこで親王は諏訪、滋野、仁科、上杉、伴野、瀬津等の諸豪を引つれて、木曾路から美濃國まで御出かけになつたが、未だ至らざるに男山遂に陥り、援軍は中途から引返した。高宗は此時御留守居役を承つて居たらしい。

八

武藏野の戦後、北條時行は大膽にも相模國に潛み、再舉を講じつゝあつたが、遂に尊氏の偵知する所となつて捕へられ、龍の口に斬られた。時は正平八年五月二十日のことである。時行は建武二年七月には賊となつて鎌倉に攻入つたけれども、尊氏叛するの後、その年の十二月勅免を蒙つてより無二の官方となり、建武年間に信州に在つた頃から、伊那の士心を收攬し、宗良親王を奉戴して自ら中堅となり、高宗を輔佐役とし、諏訪氏を外郭としたものであらう。時行は北條九代の餘威を以てしたることであるから、この位の事は出来たことと思ふ。彼の斬られた時年尙四十

に充たなかつた。惜しむべき眼りである。

時行の死後に於ては高宗が其遺志を繼いで終始渝らず、大河原の地は、隱然東國に於ける吉野朝の重鎮となつて居た。これは全く高宗が芳烈比類なきの致すところである。李花集「いはて思ふ云々」の御歌を拜讀するものは親王が如何に高宗を信賴として居られたかよく判るであらう。

「大日本史料」に「勝山小笠原古文書」を引照して次の如き記事がある。

七月五日（正平八年）尊氏、信濃守護小笠原長基仁科氏を破り香坂氏を攻むるを褒す。（長基は貞宗の孫である）

戦のあつた場所は明かでない。

かくて、正平九年の九月親王は越後へ進出され、同國宇加地城を御攻になり、（三浦和田文書）十年の四月には脇屋義治等を引つれて、北軍と越後志都乃岐大島の二莊に戦はれたことがある。何れの場合も充分の戦果を収められず、間もなく信濃へ御歸りになつたことと思はれる。

傳ふる所によれば、十四年に香坂高宗、藤原光資、井伊直朝等は三百餘騎を引つれて、畠山國清の將江戸堯寛を座光寺原に討つとある。

十五年、天皇は住吉の行宮に幸したまひ、親王に詔を下して出兵の御催促があつたので、急遽

出發の準備に取かゝられたが、此時恰も信濃路は寒氣早く至り、道路は氷雪深く鎖して人馬通じ難く、如何とも仕様がなかつたので中止せられた。

この頃のことであらう、親王が姨捨山附近に御住居になつたことが、李花集によつて窺はれる。親王が此地まで出られた事は、此時分に信州官方の勢力上に一發展を來した爲であらう。埴科郡の戸倉村に信濃宮モトリノミヤ警塚モトリノツカといふ遺跡が現存して居るのは、此間の消息を語つて居るものである。

斯る間に、後村上天皇は病を以て崩御あらせられた。無常の風こそ實に果敢なきものなれ。曩には、延元四年の夏、井伊城で父天皇の悲報に接し、今はまたこの訃音を耳にせられたる親王の御落膽はどんなであらせられたであらうか。

此時に當り、親王は依然として群山重疊の此の山奥に占據して、遠三越上の官方と氣脈を通じ、勢力の進展に努めて居られたから、恰も本州を中斷した形であつた。従つて、武家方の爲には當さに額上の巨瘤の如きもので、是非共之を根本的に掃蕩するの必要があつた。正平二十四年十月足利氏は上杉朝房、畠山基國等到大河原の攻撃を命じ、今川範氏を別軍として下條口から迫らしめた。時に大河原城中には藤原光資、香坂高宗あり、同志を部署して之に當つた。

十月上杉の軍は和田峠を扼して居た諏訪氏の軍を破つて諏訪に入り、畠山は青柳口より攻めよせた。會々大雪連日、兩軍は野營を張つて相峙するの止むなきの状況であつた。急を聞いて、高宗は弟の高行と共に、五百餘騎を以て諏訪へ殺到し來り、十二月二十一日の夜青柳口に畠山の軍を破り、官軍の諸將と力を併せて遂に和田峠を回復したので、上杉畠山は永く留る事を得ずして武藏に還り、小笠原氏も亦退いた。此時今川氏は下條口に於て、知久氏と對陣して居たが、大手の敗報を聞いて、戦はずに還り去つた。

其頃大川原の城に將軍の宮籠らせ給ふ灘谷の族並に高坂の高宗木曾上杉等隨ひ奉る關東勢と合戦して、十月より十二月下旬に及ぶ、其年信州大雪ふり寒氣甚し、是により兩軍互に戦を止め、關東勢國に歸る。(南方紀傳)

十月十三日滿詮武州より歸京す。上杉源正少弼朝房畠山右衛門佐基國入道得本、武州本庄より信州に發向、同國大川原の城に、中務卿宗良親王是を守つて、滋野一族香坂高宗木曾上杉等之に屬す。是於合戦、十月より十二月下旬に至つて戦止まずして雌雄決せず。既にして、寒氣甚しく深雪故雙軍屈して互に兵を引。(櫻雲記)

九

建徳元年の正月、親王は戦勝に乗じて、西上せられやうとした。高宗は其時機にあらざるの故を以て、切に御諫めを申上げたが、御用ひなく、光資を大河原に留め置き、發足せられた。此時高宗は警衛の任を承りて扈從した。木曾路より美濃に入らせられた。

木曾路川うつたへ瀬々の浪ならは行きめぐりても立ちかへらまし

宗良親王

然るに、武家方の勢蔓延して行手の諸道が何れも塞つて居た爲に、親王は尾張の犬山から左へ折れて東海道に出て、三遠を経て再び大河原に歸着せられた。

宗良親王は芳野へ御上り、民部卿光資は猶信州に止りて大川原城を守る。香坂是に従ふ。

(南方紀傳)

爰於、宗良親王吉野の行宮に至らんと欲し、信州を發す。香坂高宗等頻に是を止むといへども聞かずして、民部卿光資を大河原の城に残す。高宗猶も屬す。宗良兼て志す事も違變して中途に迷ふ。時に和歌を詠す。

暫したに吹かぬ間もかな風のみになつ塵のみの在所定めて

既に美濃國に至つて、犬山より鳴海の浦近く出で、海邊を見て之を詠す。

山路より磯邊の里に今日は來て浦めつらしき旅衣かな

(櫻雲記)

是より先、上杉畠山の徒は三度まで信州に侵入したが官方は例の險要に據つて防ぐことが嚴重であつたから、彼等も遂に斷念して不成功に引き退いた。

一説に、正平廿五年親王は越中國へ赴かれ、文中二年には大河原へ御歸りになつた。とある。

文中三年の冬親王は武士僅に二十騎許を從へて信州を出で、再び西上の途に就かれた。蓋し此頃に至つて吉野信州間の路が漸く通じ、往來が容易になつた爲であらう。かくて今度は何等の障害もなく南都を過ぎて春日社に詣でられ、三輪には特に御泊りがあつて、行宮に歸られた。親王の延元三年に關下を辭されてより、風雨霜雪實に三十七年を経過して居る。「櫻雲記」の

今年冬、宗良親王信州大河原より南朝へ來る。去る延元の頃東に下りて遙に年月を経て、今爰に至つて其見し人も失せ果て、最も愁を催し、獨懷舊といふ事を詠す。

同じくは共に見し代の人もかな戀しさをたに語り合せん

の本文を讀んで見ると親王が當時をぞろに懷舊の涙にむせび給ひし狀、見るが如くである。

此時に當り、九州其他四方の南軍が頗る振はざるの狀であつたから、親王は意を決して天授三年の末つ方、再び信州へ御出ましにならうとして途次大和國長谷寺に御登りになり、茲で薙髮し給ひ、それから大河原へ御入りになつて義兵を募り、京都鎌倉の確執に乗じて事を擧げようとせら

れたが彼等兩家の和が成立したため、遂にこの事も空しくなり、且は信州に於ける官方も漸くに離散し、一貫して志の渝らないで忠勤を擯んずるものは香坂高宗以下二三の人がある許りとなり、頽勢の赴く所又如何ともなし難く、天授六年には二たび西上せられ、新葉和歌集の撰集に従事せられた。

高宗より外は皆背きしかば、五月信濃を出で吉野へ移らせ給ふ。夫れより河内國山田といふ所に閑居ありて新葉集を選び給ひて南帝へ奏し給へり。(南方紀傳)

今年(天授六年)入道宗良信州大河原にありて義兵を起さんと欲すといへども、南方に通ずる兵士皆以て背きて香坂高宗のみ心を變ぜず、忠を勵さんとす。宗良計謀成らず信州を出で河内國に至つて山田に居す。(櫻雲記)

傳ふる所によれば、親王は又大河原に赴かれたが、舉兵の事意の如くならず、千載の恨を吞んで薨去せられた。凡そ元中の頃といはれる。御歿年は詳かでない。

親王の薨所につきては異説が多い。後人遠江國井伊城附近に親王の御墓ありと稱し、明治に至りて親王を祀れる官幣中社井伊谷神社亦其處に建設せられしと雖も、大日本史は鎌倉大草紙に依りて信州浪合の薨去に重きを置き、博士黑板勝美氏は醍醐三寶院の文書を引きて、新に大河

原薨去説に重きを置けり。孰れが眞、孰れが偽か、著者未だ考ふる所あらず。(信濃史蹟)

一〇

上來、親王の御一生を叙したことに依つて、高宗に關する事蹟の大體を述べた積りであるが、要するに、興國年間親王が北條時行以下の官方諸將の奉ずる所となつて、大河原に根據を御定めになつてより以來、忠誠の心を以て常に親王に隨從して之を擁護し奉り、時に或は千軍萬馬の間を往來して、武家方の膽を寒からしめ、親王が大河原に御不在の時には殊に神ノ峯の知久氏と氣脈を通じて、根據地大河原の安固を圖り、以後後顧の憂なからしめたものである。高宗は行住坐臥、片時も親王を忘るゝの隙なく、如何に衷心から親王に仕へ奉つたかは、何よりも確實である所の御自詠の歌集「李花集」中、次の御歌を拜讀すれば直に判ることである。

大河原と申侍し山の奥をも又立出侍しに行末もいかなど申て香坂高宗なとしきりに止め侍しを猶ふりすてゝ出侍しにそなと思し方も又さうゐする事もありしかは中空にたよひし頃よみ侍し

しはしたに吹ぬ間も哉風の上に立塵の身の有家定めん

信濃國大河原といふ深山に籠て年月をのみ送侍しに更に何時と待つへき期も無ければ香

坂高宗などか朝夕の霜雪を拂ふ忠節も其跡方なからん事さへ片腹痛く思ひつつけられ
いはて思ふ谷の心も苦しきは身を埋木と過す成覺

御歌は僅に二首に過ぎないが、高宗の赤誠を表明する點に於ては、管々しき千萬言にも優つて居る所の有力なる微證である。

右の外、古い書物に散見して居る高宗關係の部分を書きすれば次の如くであるが、要は前記「李花集」の御歌以上に出ないものであることを、斷つて置く。

四年（延元）八月、甲斐國白河を通りて、信濃國諏訪へ入らせたまひける。香坂四郎高宗無二の志を盡して、滋野の一族並に上社の者共を招集ける。（中略）天授三年の冬信濃へ御下向の時、和州長谷寺にて御節を落させ給ひし、信濃の官方皆背き奉りて香坂が外は頼みますべき者なかりしほどに、五年吉野に遁れ入らせ、云々（信濃宮傳）

甲斐國白須といふ處の松蔭に御馬を止めさせ給ひて、「假初の行通ひ路と聞しかといさや知らずのまつ人もなし」信濃宮大河原といふ處の香坂高宗が家に入らせ給ふ。駿河より御送り参りし人々歸り侍りければ、興良親王の御許へ御文有て、「ふしの根の煙りを見ても君問へよ淺間の獄はいかに燃ると」（中略）天授三年信濃の官方背き参らせ、香坂高宗が外は御敵となりしかば、

將軍の宮信濃を御出有て、河内國山田といふ處に立忍ばせ給ひける。云々、（異本信濃宮傳）

越中石黒に住み給ふや。土肥以下の國人忍々に馳せ参じて守護し來り、信州大河原に歸り給ふや。香坂高宗美しき庵を新に建て、安堵し奉るのみならず、神家の一族知久太郎左衛門敦貞及び滋野の人々には海野小太郎普幸を始めとして、其他勤王の志を傾けて守護し奉りぬ。（三河志）傳ふる所に曰く、高宗は唯宗良親王の御一代に仕へて忠烈を致したのみに止まらない。御子の尹良親王、尹重王、合せて御三代に仕へ、應永十四亥三月廿七日を以て大河原城に歿した。（この歿年は上藏の宗久寺にある高宗の位牌及墓石に刻まれてある所に據る）又嫡男の松平高重、二男の二郎及一族の高行等に至るまで、同様の忠節を盡して信濃宮三代に仕へ奉り、其の末葉は正統綿々、大河原城に繼續したが、天文二十三年五月、甲斐武田信玄の臣山本勘助の陥るゝ所となり、城も亦廢墟となつて家名を失ふに至つたとのことである。（これは傳説）

大河原宇上藏の香坂氏靈牌の置かれてある宗久寺を隔つること西に數丁、小湍河に臨んだ丘上宇彈正林の地一叢の松樹千歳の餘韻を傳ふる所、自然石長さ三尺の斷碑、碑面微かに「永林院殿彈室良正大居士」と讀まれるもの、これ即ち香坂高宗の英靈が永へに眠れるおくつき所である。風雨星霜六百年、馨はしき其苦節と其義烈とは畏くも天聽に達して、去歲曠古の御大典に際して、

贈位の恩賞を受けて四位に叙せられた。高宗たるものまた以て嘆すべしである。

吉野朝の忠臣、我が郷國の烈士香坂高宗と其周圍の史的事實とに就いては右に述べたる所を以て盡きたりとなすものではない。更に大に研究闡明の餘地を有するもの多々あるべしと信ずる。けれども餘りに長くなるの虞があるから、これを他日に譲ることとして茲に筆を擱く。

(大正五年十月)

附記 参考及引用書目

大日本史料、宗良親王、信濃史蹟、下伊那郡誌資料、赤石嶺於魯史、李花集、櫻雲記、南方紀傳、
信濃宮傳、太平記、勝山小笠原家譜、伊那史料叢書

日 樹 上 人

—上飯田村池上古墳の由來—

末法濁亂の世奇傑日蓮は「立正安國論」を提げ猛然として起ち「日本法華經の行者」と稱して、妙法蓮華經の發現を期し、あらゆる辛酸や迫害やを排除し遂によく法華弘通の大事業を成就した。聖日蓮「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊」を絶叫して衆生の濟度者、佛教の改革者を以て畢生の任務とした。數回の法難に屈せず、撓まず、折衝奮闘、攻撃的精神の充實した其生涯と破邪顯正到る所對手の心膽を寒からしめた其事歴は眞に愴夫をして猛然と起たしむるに足るものがある。

山高く水青き郷國は上飯田村、白山權現社の隣接地宇池上に其の遺骨を埋むる所以、日樹上人の如き最も徹底的、最も深刻に其の宗祖日蓮の衣鉢其の精神を傳へたものであらねばならぬ。上